

令和7（2025）年度マアナゴ伊勢・三河湾の資源評価

水産研究・教育機構

水産資源研究所 水産資源研究センター（横内一樹・阿波 望・川内陽平・
竹茂愛吾・小柳津瞳・澤山周平・青木一弘）

参画機関：愛知県水産試験場、三重県水産研究所

要 約

本資源の資源状態について、小型機船底びき網の資源量指標値に基づいて評価した。マアナゴ伊勢・三河湾は、主に小型機船底びき網漁業、かご漁業により漁獲されている。伊勢・三河湾内の漁獲量は、2000年までは概ね1,000トン以上で推移していたが、2001年に降減少し、2011年には500トンを割り込み、2024年は36トンであった。小型機船底びき網漁船の漁獲努力量は1990年頃から減少傾向が続いている。小型機船底びき網の標準化CPUEを資源量指標値とし、その推移をみると短期的に変動しながら減少しており、2024年は過去最低を更新した。1989～2024年の標準化CPUEの最大値と最小値の間を三等分して定めた基準から2024年の資源水準は低位、直近5年間（2020～2024年）の標準化CPUEの推移から資源動向は減少と判断した。資源水準および資源量指標値の変動傾向に合わせて漁獲を行うことを管理目標とし、2026年のABCを算定した。なお、本報告書におけるABCは漁業法改正前の考え方に基づく基本規則2-1)を適用した値である。

管理基準	Target/ Limit	2026年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの 増減%)
0.7・Cave 3-yr・0.82	Target	27	—	—
	Limit	34	—	—

Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量である。ABCtarget = α ABClimitとし、係数 α には標準値0.8を用いた。ABC算定のための基本規則2-1)により、ABClimit = $\delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算した。 δ_1 はCaveを用いる場合の低位水準の推奨値である0.7とした。Ctは、Ct = Cave 3-yrとし、Cave 3-yrは直近3年間（2022～2024年）の漁獲量の平均値である。 γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ で計算し、kは係数（標準値の1.0）、b（-0.03）とI（0.16）は、それぞれ直近3年間（2022～2024年）の標準化CPUEの傾きと平均値である。

年	資源量 (トン)	親魚量 (トン)	漁獲量 (トン)	F 値	漁獲割合 (%)
2019	—	—	224	—	—
2020	—	—	122	—	—
2021	—	—	90	—	—
2022	—	—	78	—	—
2023	—	—	64	—	—
2024	—	—	36	—	—

漁獲量は伊勢・三河湾内での「あなご類」漁獲量。

「あなご類」の県計漁獲量から外海底びき網分を控除して湾内漁獲量を算出した。

湾内での「あなご類」漁獲は概ねマアナゴである。

水準：低位 動向：減少

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり。

データセット	基礎情報、関係調査等
漁獲動向	漁業・養殖業生産統計年報(農林水産省) 外海底びき網「あなご類」漁獲量(愛知県) 主要港「マアナゴ」水揚量(愛知県、三重県) 漁場一斉調査(愛知県) 標本船調査(愛知県、三重県) 生物情報収集調査(愛知県、三重県)
漁獲努力量	主要港の小型機船底びき網・あなごかご漁船出漁状況(愛知県、三重県) 標本船調査(愛知県、三重県)
CPUE、資源量 指数	小型機船底びき網 CPUE(愛知県、三重県) 標本船調査(愛知県、三重県) のれそれ混獲量(愛知県) 着底稚魚調査(三重県)

English title (authors)

Stock assessment and evaluation of whitespotted conger in the Ise–Mikawa Bays (fiscal year 2025).

(Kazuki Yokouchi, Nozomi Awa, Yohei Kawauchi, Aigo Takeshige, Hitomi Oyaizu, Shuhei Sawayama, Kazuhiro Aoki)

1. まえがき

漁獲統計の集計単位「あなご類」にはマアナゴ以外に、クロアナゴ、ゴテンアナゴ等も含まれるが、内湾域における漁獲の大部分はマアナゴである。伊勢・三河湾は、全国の主要なマアナゴ漁場の一つであり、マアナゴは主に小型機船底びき網漁業（以下、「小底」という）およびかご漁業により漁獲されている。

本資源は、2002年度に資源回復計画の対象魚種に指定され、底びき網漁業、かご漁業における小型魚の再放流、小型魚混獲回避のための底びき網の目合い拡大などの漁具改良、船びき網によるマアナゴ仔魚「のれそれ」を目的とした操業の制限などの措置が実施された。資源回復計画は2011年度で終了したが、同計画で実施されていた措置は、2012年度以降、愛知県および三重県が定める資源管理指針の下で、一部見直しが行われつつ継続して実施されてきた。また、2020年12月の改正漁業法施行にともない、同措置は資源管理協定の枠組みへと順次移行することとなり、協定締結以降は県が定める資源管理方針にもとづく自主的な資源管理措置として実施されている。

2. 生態

(1) 分布・回遊

マアナゴは伊勢・三河湾（図1）のほか、日本沿岸のほぼ全域および朝鮮半島沿岸、渤海、黄海、東シナ海に幅広く分布する。主たる分布域は沿岸浅海域であるが、沖合底びき網などでも漁獲され、最も深所からの採集記録は水深830m（町田1984）であり、鉛直方向にも幅広い分布水深帯を持つ種である。本種の仔魚（レプトケファルス）は、南西諸島に近い黒潮流域で採集報告があり（黒木2006）、黒潮などの海流による長距離の移動分散の後、沿岸に接岸するものと推測されている。春季に変態直前から変態期の個体（全長90～130mm）が沿岸域に出現し（望岡2001）、浅海の静穏域で変態して着底する（小沼1995）。

伊勢湾においては、3月頃に湾口から湾中部で変態して底生生活に移り、4月頃から湾内の浅所に移る（内田ほか1968）。変態後の稚魚（全長10～20cm）は6～7月に水深10m以浅の海域で混獲される。全長20cm以上の個体は、9月以降、翌年の夏季にかけて湾全域に分布する。冬季の移動はほとんどないが、夏季に全長40cm程度に成長した大型群から順次湾口部に移動する（中島2004）。伊勢湾で漁獲されたマアナゴは2歳までの若齢魚が大部分である一方、熊野灘では高齢魚が多いことから（窪田1961）、湾内で着底・成長した個体は加齢とともに湾外へと移動するものと考えられ、湾外へ出たマアナゴが再び湾内へ入ることはほとんどないと考えられる。

マアナゴは雌雄異体であり、沿岸域でのマアナゴの性比は一般に雌に偏ることが知られているが（高井1959、窪田1961、片山2010）、伊勢・三河湾におけるマアナゴの性比は雄に偏っていることが特徴的であり（黒木・堀井2005、丸山2016）、全長40cm以下では雄の割合が高かったが、全長40cm以上の大型個体については雌が大部分であった（黒木ほか2007）。したがって本海域では大部分の雄は、全長40cmに達するころまでに、雌より早く湾外に出るものと考えられる。

(2) 年齢・成長

マアナゴの一般的な成長の目安として、大阪湾におけるマアナゴの年齢と全長の関係を

図2に示す。雌の場合、1歳で概ね全長28cm、2歳で38cm、3歳で48cm、4歳で57cm、雄の場合、1歳で27cm、2歳で37cm、3歳で45cm、4歳で52cm程度に成長し、雌の方が若干成長の早い傾向がある（鍋島 2001）。これらの年齢・成長関係に von Bertalanffy の成長式をあてはめると、以下の成長式が推定された。

$$L_t(\text{雄}) = 86.0 \times [1 - e^{-0.183(t+1.06)}]$$

$$L_t(\text{雌}) = 206.0 \times [1 - e^{-0.059(t+1.45)}]$$

ここで、 L_t は年齢 t 歳（10月に加齢）におけるマアナゴの全長（cm）である。

伊勢湾のマアナゴは、窪田（1961）によると、1歳で全長約20cm、2歳で約30cmに成長するとされたが、黒木ほか（2007）による年齢査定では、漁獲の中心となる全長40cm未満のマアナゴの年齢は1歳（1+）で、40cm以上の大型個体では2歳（2+）が主体で3歳（3+）以上のものはほとんどいなかった。したがって、伊勢・三河湾のマアナゴの成長は大阪湾の結果（図2）と同程度と考えられるが、満2歳になるころまでに雄の大部分は湾内からいなくなり、雌でも満3歳を超えて湾内にとどまる個体は少ないものと考えられる。

（3）成熟・産卵

東シナ海において第二次卵黄球期の生殖腺をもつ雌の捕獲記録はあるものの（Kawazu et al. 2015）、成熟した卵を持ったマアナゴ親魚が天然では全く得られていないなど、成熟・産卵生態については不明な点が多い。しかし、産卵場の一つが、沖ノ島島南方の九州パラオ海嶺付近に確認されており（Kurogi et al. 2012）、その他に産卵場は確認されていないことから、マアナゴはニホンウナギに近い成熟・産卵特性を持ち、資源単位としては広域にわたるものと推測される。

（4）被捕食関係

変態直後の稚魚（全長約10cm）では、コペポダ、ヨコエビ類、甲殻類稚仔、多毛類などからなる小型の底生生物を捕食する。小型魚から中型魚（全長15～50cm）は多毛類、エビ類、ハゼ類を中心に多様な生物を捕食し、全長50cm以上の大型魚では魚類、軟体類の大型種の捕食が多くなる（鍋島 2001）。伊勢・三河湾におけるマアナゴの消化管内容物をみると、小型魚から中型魚においてもカタクチイワシを筆頭に魚類の割合が高く、次いでエビ類、シャコを中心とした甲殻類を捕食している（日比野 2016、曾根ほか 2022）。なお、捕食者については不明である。

3. 漁業の状況

（1）漁業の概要

伊勢・三河湾におけるマアナゴの漁獲は、主に小底、かご漁業により行われている。伊勢湾の小底の漁場は伊勢湾全域に形成され、かご漁業の漁場は沿岸に沿って広く形成される（中島 2004、沖ほか 2004）。愛知県においては、知多地区の漁獲量が最も多く、豊浜（小底）、日間賀島（小底、あなごかご）の2漁協で県全体の3分の1以上を漁獲している（岩

田 2004、水野 2004)。標本船による月別の単位漁獲努力量あたり漁獲量 (CPUE: kg/hr) の漁場分布をみると、知多半島周辺で漁獲がみられる (図 3)。

また、本種の仔魚は「のれそれ」として船びき網等で混獲されており、その一部は漁獲物として水揚げされていたが (沖ほか 2004)、2016 年以降はイカナゴの操業自粛により「のれそれ」の混獲がない。

(2) 漁獲量の推移

愛知県および三重県における 1980～2024 年の「あなご類」漁獲量は、44～1,745 トンの範囲で増減しており、2000 年以前は、概ね 1,000～1,500 トンの範囲内で推移していた (図 4、表 1)。2004 年以降は、2007 年を除き 1,000 トンを割り込んだ状態で減少傾向にある。漁獲量を県別にみると、1980～2000 年は、愛知県で、概ね 600～1,000 トン、三重県では 300～600 トンで推移していたが、その後は減少傾向にある (図 4、表 1)。

なお、愛知県での「あなご類」漁獲には、渥美半島外海側での底びき網による漁獲が相当量含まれており、1995～2024 年の外海底びき網による「あなご類」漁獲量は 8～206 トンの範囲で、そのうちマアナゴの割合は 13～37%であった (表 1)。「マアナゴ伊勢・三河湾」の評価単位としての漁獲量は、県合計の「あなご類」漁獲量から湾外での漁獲に相当する外海底びき網による「あなご類」漁獲量を控除した量となる (図 5、表 1)。1995 年以降の湾内のマアナゴ漁獲量は、2000 年までは概ね 1,000 トン前後で推移していたが、2001 年以降は 1,000 トン以下に減少、2011 年以降では 500 トンを割り込んでおり、2024 年は 36 トンと過去最低を更新した (表 1)。なお、三重県には外海の底びき網がないことから、湾外での「あなご類」漁獲はないものとした。

また、本種は産卵場が沖ノ鳥島南方海域にあり、「マアナゴ伊勢・三河湾」は広域にまたがるマアナゴ資源の一部とみなせることから、日本全国および韓国の漁獲量も参照しておく。日本全体では、1995～2024 年の間に、概ね 13,000 トンから 1,900 トン前後へ減少している (図 6、表 1)。韓国の漁獲量は日本の 2～3 倍程度であり、ピークでは年間約 30,000 トンを記録した後、1998～2001 年に一時 8,000 トン前後まで大きく減少した。その後、約 19,000 トンまで回復し、近年は 12,000 トン前後のレベルにある (図 6、表 1)。

(3) 漁獲努力量

三重県の主要水揚げ港 (若松地区・有滝地区) を根拠地とする小底漁船およびあなごかご漁船の延べ出漁隻数 (隻・日) の経年変化を図 7 に、愛知県の主要水揚げ港 (豊浜漁港) を根拠地とする小底漁船延べ出漁隻数の経年変化を図 8 に示す。三重県においては、いずれの漁業種類においても出漁隻数は減少傾向にあり、三重県若松地区においては、2018 年からあなごかご漁船の出漁実績がなく、小底についても 2021 年 10 月以降出漁実績がない。愛知県の小底においては、2000～2008 年にかけて出漁隻数は安定していたものの、2008 年からは再び減少傾向にある。豊浜漁港の小底は、2017 年から断続的にみられているシャコの不漁の影響により魚類狙いの網の使用頻度が増えるなど、操業形態が変化していることが推察される。しかしながら、マアナゴの主漁期については操業形態に顕著な変化はみられていないため (愛知県 未発表)、シャコの不漁年における出漁隻数ベースの漁獲努力量がやや過大評価となっている可能性はあるものの、その影響は限定的であると考えられる。

2020 年は、新型コロナウイルス感染症対策の影響により出漁が控えられていたことなどで、漁獲努力量が減少したが、2021～2024 年も同様の水準にある。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

愛知県・三重県における主要水揚げ港を根拠地とする小底標準化 CPUE を資源量指標値とし、水準・動向を判断した（補足資料 1）。この際、標準化により CPUE に含まれるバイアス、すなわち水揚げ港により異なる漁獲効率の影響を取り除いた（補足資料 2）。その他、各県の生物情報収集調査および標本船調査の結果も現在の資源状態の判断材料とした（補足資料 1）。

(2) 資源量指標値の推移

本資源評価では、1989～2024 年の標準化 CPUE を資源量指標値とした。標準化 CPUE は増減を繰り返しながら近年にかけて減少しており、2024 年の標準化 CPUE は過去最低を更新した（図 9、表 2）。愛知県・三重県の主要水揚げ港を根拠地とする小底によるマアナゴの CPUE（図 10、11）および小底標本船調査データから算出した 2004～2024 年の資源量指数（ $\text{km}^2 \cdot \text{kg}/\text{hr}$ ）（図 12）においても減少傾向が続いている。

伊勢・三河湾で漁獲されるマアナゴの主体は、前年に仔魚（のれそれ）として湾内に来遊した年級であると考えられる。2015 年までの来遊状況については「のれそれ」の混獲量の指標（混獲指数）と翌年の豊浜港の小底によるマアナゴの CPUE の関係により検討されていたが、2016 年以降はイカナゴの全面操業自粛により「のれそれ」の混獲がなく、データを得ることができない。そこで、2015 年以降の三重県着底稚魚調査結果をもとに、仔魚から変態した直後の着底稚魚の個体数密度と翌年の漁獲状況との関係について検討した（補足資料 3）。加えて、仔魚と稚魚のデータの唯一揃う 2015 年を基準に補正を行い、仔魚・稚魚指数を算出し、来遊状況について検討した（図 13、補足資料 3）。

(3) 資源の水準・動向

過去 36 年間（1989～2024 年）の資源量指標値（標準化 CPUE）の最大値と最小値間を三等分して、1.50、0.79 を境に上から高位、中位、低位と定め、水準を判断すると（図 9、表 2）、2024 年は 0.09 で低位にある。動向は直近 5 年間（2020～2024 年）の標準化 CPUE の推移から減少と判断した。

5. 2026 年 ABC の算定

(1) 資源評価のまとめ

小底によるマアナゴの標準化 CPUE を資源量指標値として水準・動向を判断すると、資源は低位水準で減少傾向にあると判断される。

(2) ABC の算定

資源水準および資源量指標値（標準化 CPUE）の変動傾向に合わせて漁獲を行うことを管理目標とし、ABC を算定した。本報告書における ABC は漁業法改正前の考え方に基づ

く基本規則 2-1) (水産庁・水産機構 2025) を適用した値である。

$$ABClimit = \delta_1 \times Ct \times \gamma_1$$

$$ABCtarget = ABClimit \times \alpha$$

$$\gamma_1 = (1 + k \times (b / I))$$

ここで、 C_t は t 年の漁獲量。 δ_1 は資源水準で決まる係数、 k は係数、 b と I はそれぞれ資源量指標値の傾きと平均値、 α は安全係数である。 γ_1 は資源量指標値の変動から算定する。

C_t は伊勢・三河湾内でのマアナゴの直近 3 年間 (2022~2024 年) の平均漁獲量 (Cave 3-yr = 59 トン) とした。資源量指標値 (小底の標準化 CPUE) の、基本規則で標準とされている直近 3 年間 (2022~2024 年) の動向から b (-0.03) と I (0.16) を定めた ($\gamma_1 = 0.82$)。 k は標準値の 1.0 とした。 δ_1 は、 C_t を 3 年平均漁獲量とした場合の低位水準の推奨値である 0.7 とした。 α は標準値の 0.8 とした。

管理基準	Target/ Limit	2026 年 ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F 値
0.7・Cave 3-yr・0.82	Target	27	—	—
	Limit	34	—	—

Limit は、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Target は、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量である。 $ABCtarget = \alpha ABClimit$ とし、安全係数 α には標準値 0.8 を用いた。

(3) ABC の再評価

昨年度評価以降追加 されたデータセット	修正・更新された数値
2024 年漁獲量・漁獲努力量暫定値	愛知県・三重県の小底標準化 CPUE
2023 年漁獲量・漁獲努力量確定値	2023 年漁獲量の確定

評価対象年 (当初・再評価)	管理基準	F 値	資源量 (トン)	ABClimit (トン)	ABCtarget (トン)	漁獲量(トン) (実際の F 値)
2024 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・0.44	—	—	29	24	
2024 年(2024 年 再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.45	—	—	30	24	
2024 年(2025 年 再評価)	0.7・Cave 3-yr・0.45	—	—	30	24	36 (-)
2025 年(当初)	0.7・Cave 3-yr・1.00	—	—	54	43	
2025 年(2025 年 再評価)	0.7・Cave 3-yr・1.00	—	—	54	43	

2024年ABCは、2024年再評価において、2020～2021年外海あなご類漁獲量の修正に伴う伊勢・三河湾内マアナゴ漁獲量の微増により、上方修正となっていた。

6. その他の管理方策の提言

伊勢・三河湾における現状のマアナゴ漁獲量は2010年代以降の減少傾向が顕著で、現在は過去最低の水準にある。湾外から来遊する仔魚（のれそれ）の多寡により変動するマアナゴ伊勢・三河湾では、2015年以降の湾内への来遊が低水準である可能性や（補足資料3）、内湾のマアナゴについては、来遊後の生残に影響をおよぼす近年の内湾環境の悪化が懸念されている（田島 2016、曾根ほか 2022）。湾外から来遊するマアナゴ伊勢・三河湾については、漁業管理による加入量の制御は極めて困難である。一方、いったん伊勢・三河湾に来遊した個体は、湾内で成長し1～2歳で漁獲対象となることから、加入量あたりの漁獲量の増加を目標とすれば管理効果が期待できる。10月以降に入網する小型魚は、翌年の春季から夏季にかけての盛漁期における漁獲中心と考えられることから、秋冬漁期の小型魚の保護や再放流は資源管理の観点から成長管理として有効である。

7. 引用文献

- 日比野学 (2016) 伊勢・三河湾におけるマアナゴの食性. マアナゴ資源と漁業の現状, 増養殖研究所, **3**, 101-102.
- 岩田靖宏 (2004) 伊勢・三河湾におけるアナゴ漁業の現状. マアナゴ資源と漁業の現状, 日本水産資源保護協会, **1**, 98-99.
- 片山知史 (2010) なぜマアナゴは雌ばかりなのか. マアナゴ資源と漁業の現状, 中央水産研究所, **2**, 39.
- Kawazu, M., T. Kameda, H. Kurogi, M. Yoda, S. Ohshimo, T. Sakai, Y. Tsukamoto, and N. Mochioka (2015) Biological characteristics of *Conger myriaster* during the initial stage of spawning migration in the East China Sea. *Fish. Sci.* **81**, 663-671.
- 小沼洋司 (1995) マアナゴ幼生 (レプトセファルス) の変態海域. 茨城水試研報, **33**, 103-107.
- 窪田三朗 (1961) マアナゴの生態・成長ならびに変態に関する研究. 三重県大水産学部紀要, **5**, 190-370.
- 黒木洋明 (2006) マアナゴ (*Conger myriaster*) 葉形仔魚の沿岸域への回遊機構に関する研究. 九州大学博士論文, 1-128.
- 黒木洋明・堀井豊充 (2005) 平成16年 マアナゴ伊勢・三河湾の資源評価. 我が国周辺水域の漁業資源評価. 水産庁・水産総合研究センター, 東京, 15 pp, https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2023/08/details_2004_020.pdf
- 黒木洋明・片山和史・堀井豊充 (2007) 平成18年 マアナゴ伊勢・三河湾の資源評価. 我が国周辺水域の漁業資源評価. 水産庁・水産総合研究センター, 東京, 15 pp, https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2023/08/details_2006_020.pdf
- Kurogi, H., N. Mochioka, M. Okazaki, M. Takahashi, M. J. Miller, K. Tsukamoto, D. Ambe, S. Katayama, and S. Chow (2012) Discovery of a spawning area of the common Japanese conger *Conger myriaster* along the Kyushu-Palau Ridge in the western North Pacific. *Fish. Sci.*, **78**,

525-532.

- 町田吉彦 (1984) マアナゴ, 沖縄舟状海盆及び周辺海域の魚類. 日本水産資源保護協会, 92-93.
- 丸山拓也 (2016) 伊勢湾のマアナゴの性比について. マアナゴ資源と漁業の現状, 増養殖研究所, 3, 83-84.
- 水野正之 (2004) 愛知県におけるアナゴ漁業について. マアナゴ資源と漁業の現状, 日本水産資源保護協会, 1, 293-294.
- 望岡典隆 (2001) マアナゴの初期生態. 月刊海洋, 33, 536-539.
- 望岡典隆・東海 正 (2001) マアナゴの資源生態と漁業. 月刊海洋, 33, 525-528.
- 鍋島靖信 (2001) マアナゴの成長と食性. 月刊海洋, 33, 544-550.
- 中島博司 (2004) 三重県におけるアナゴ漁業とマアナゴの生態. マアナゴ資源と漁業の現状, 日本水産資源保護協会, 1, 95-97.
- 沖 大樹・藤吉利彦・山田浩且 (2004) 三重県におけるアナゴ漁業の現状. マアナゴ資源と漁業の現状, 日本水産資源保護協会, 1, 295-296.
- 曾根亮太・日比野学・下村友季・鶴寄直文・横内一樹 (2022) 伊勢・三河湾におけるマアナゴの資源動態と肥満度, 胃内容物組成及び餌料環境の変化. 愛知水試研報, 27, 10-21.
- 水産庁, 水産研究・教育機構 (2025) 令和7(2025)年度 ABC算定のための基本規則. FRA-SA2025-ABCWG02-02, 水産研究・教育機構, 横浜, 11pp. https://abchan.fra.go.jp/references_list/FRA-SA2025-ABCWG02-02.pdf
- 田島良博 (2016) 東京湾における餌料生物の動向とマアナゴ資源について. マアナゴ資源と漁業の現状, 増養殖研究所, 3, 97-98.
- 高井 徹 (1959) 日本産重要ウナギ目魚類の形態、生態及び増殖に関する研究. 農水講研報, 8, 209-339.
- 内田和良・片岡昭吉・高井 徹 (1968) 伊勢湾におけるアナゴ科魚類の仔魚について. 水産大学校研究業績, 17, 25-34.



図1. マアナゴ伊勢・三河湾の分布域

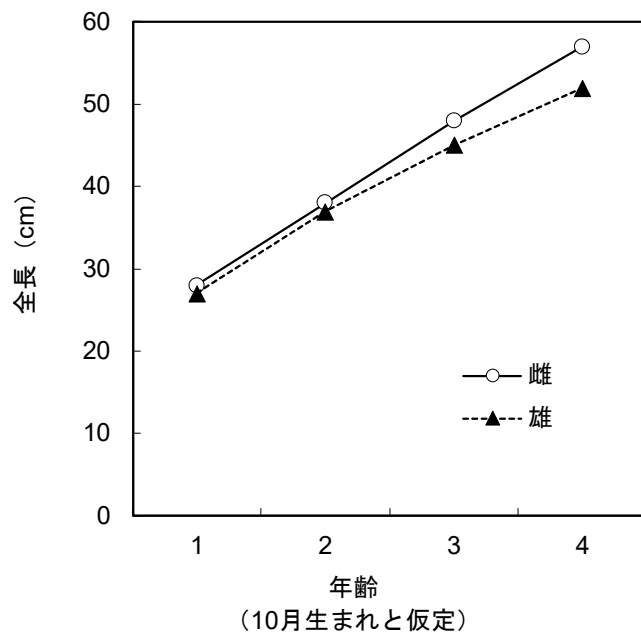


図2. マアナゴ（大阪湾）の年齢と成長（鍋島 2001）

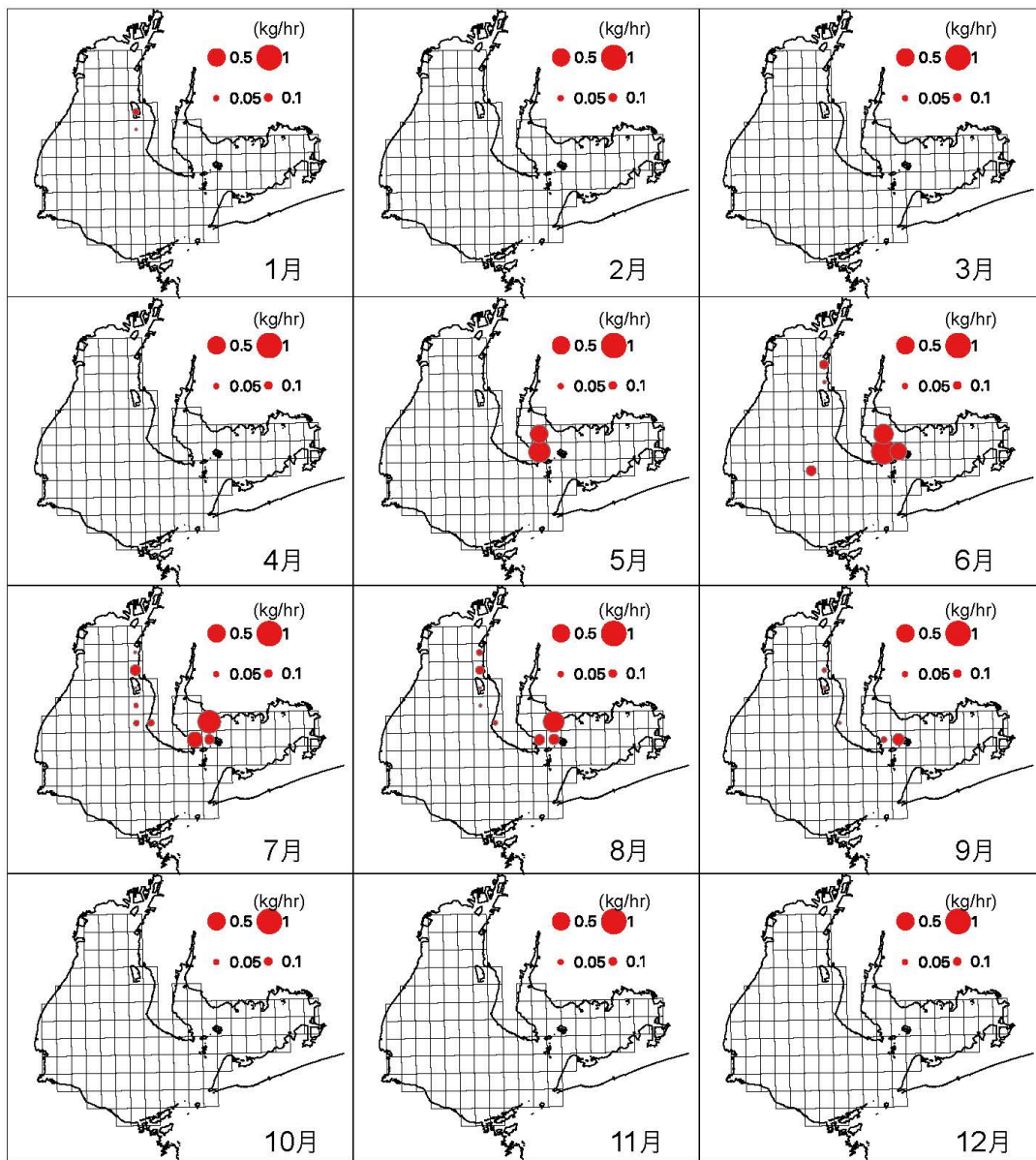


図3. 愛知県小底標本船のマアナゴの単位漁獲努力量あたりの漁獲量 (CPUE: kg/hr) (2024年1~12月)

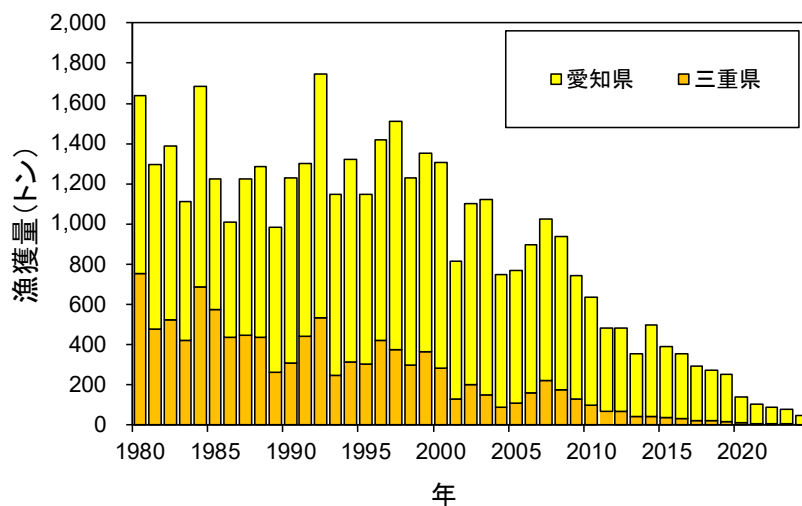


図4. 愛知県、三重県の「あなご類」漁獲量の経年変化（1980～2024年）

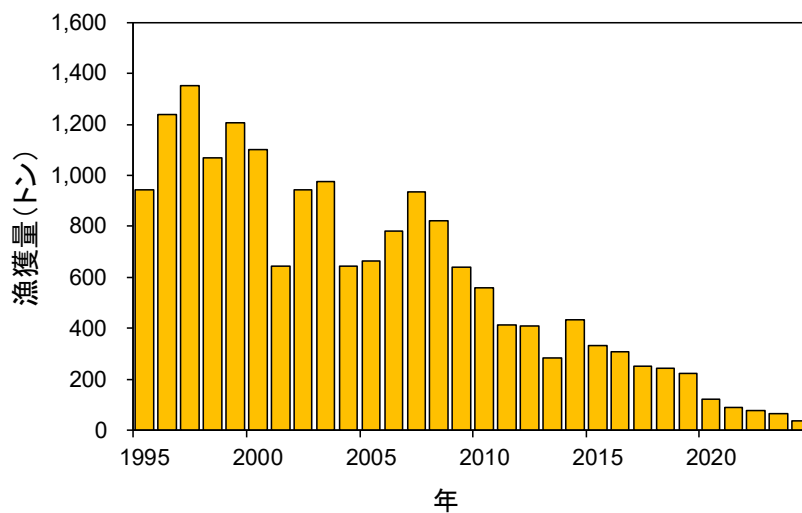


図5. 伊勢・三河湾内のマアナゴ漁獲量の経年変化（1995～2024年）

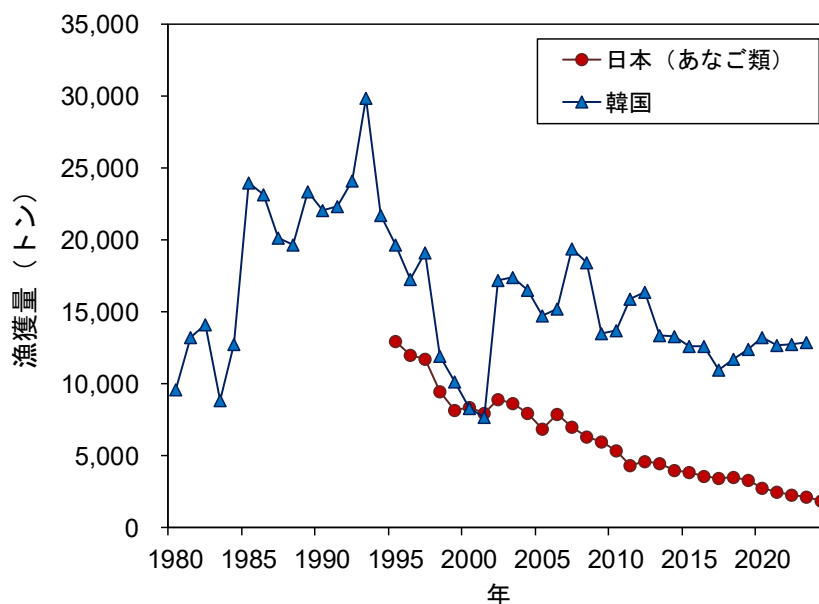


図 6. 日本および韓国における「あなご類」漁獲量の推移
 データ出典 日本：漁業・養殖業生産統計年報（1995～2024年）、
 韓国：FAO Global Capture Production（1980～2023年）。

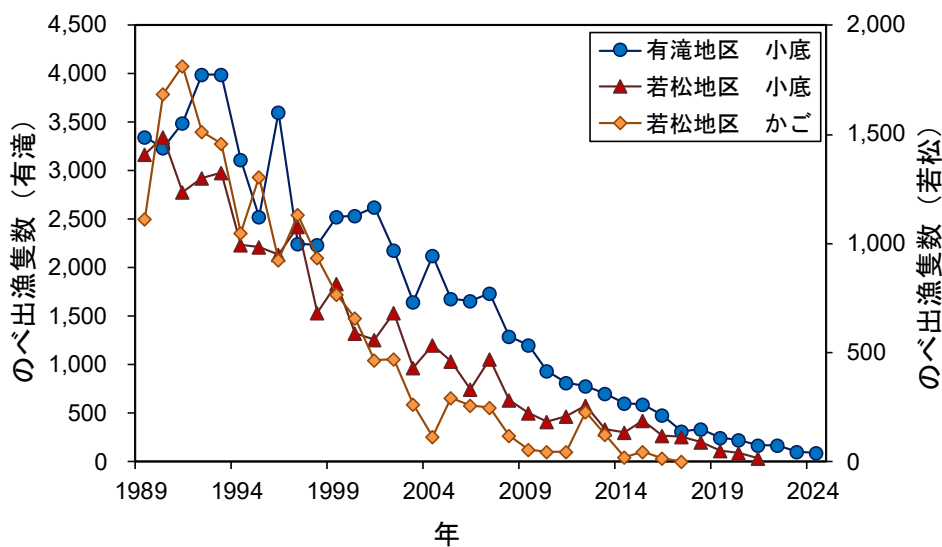


図 7. 三重県主要水揚げ港における漁獲努力量の推移（1989～2024年）
 若松地区・有滝地区の延べ出漁隻数で表示。

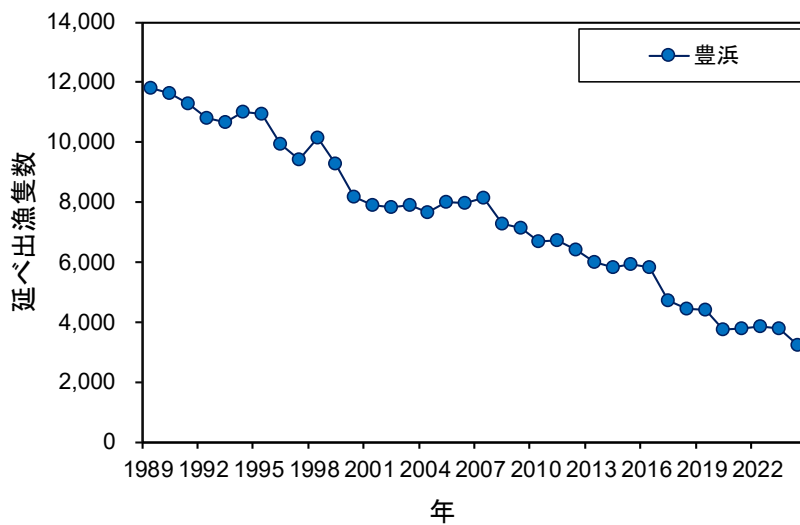


図 8. 愛知県豊浜漁港小底延べ出漁隻数の推移 (1989～2024 年)

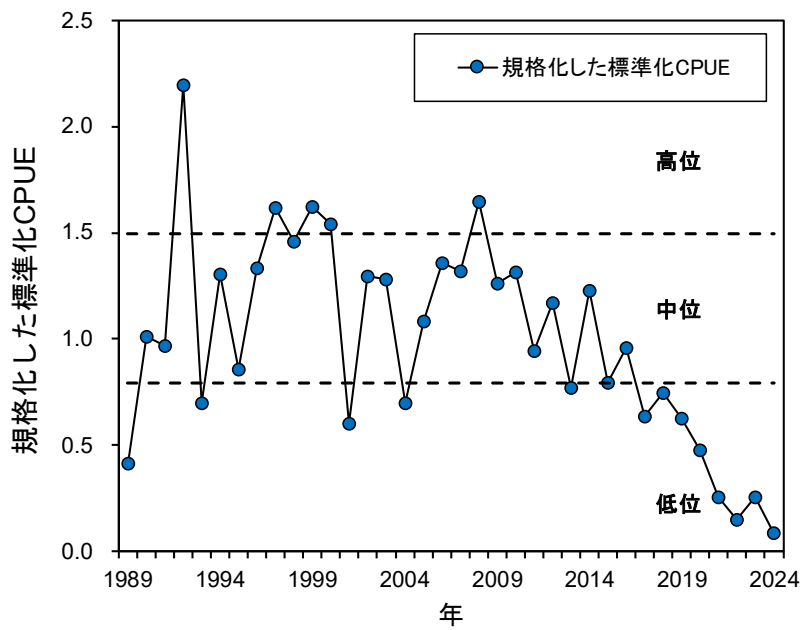


図 9. 愛知県・三重県主要港の小底標準化 CPUE の推移 (1989～2024 年)
2024 年の値は暫定値。破線は水準の境界を示す。

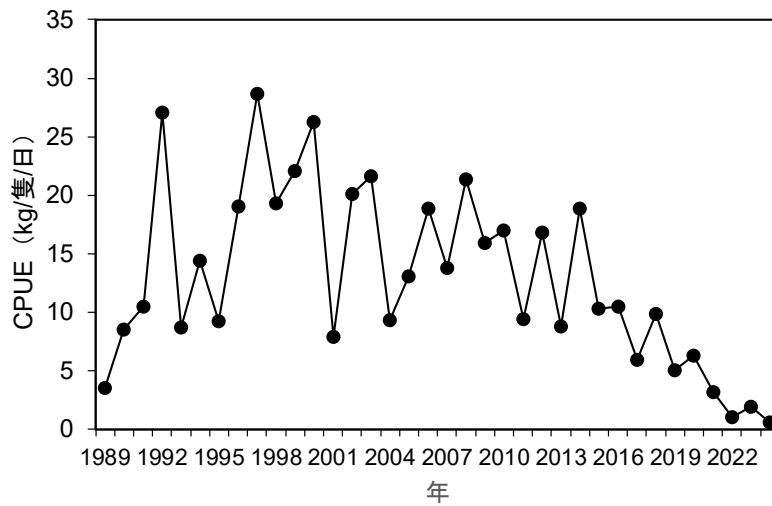


図 10. 愛知県主要港（豊浜）の小底 CPUE の推移（1989～2024 年）

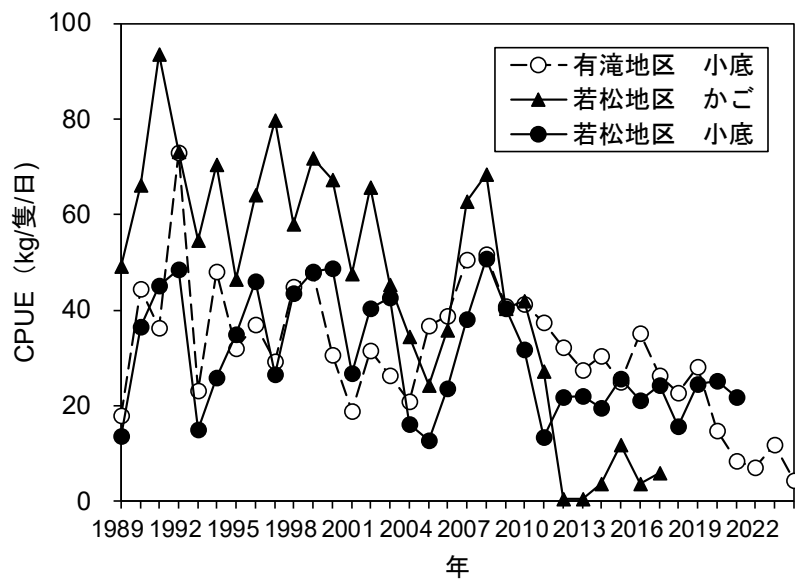


図 11. 三重県の地区別漁法別 CPUE の推移（1989～2024 年）

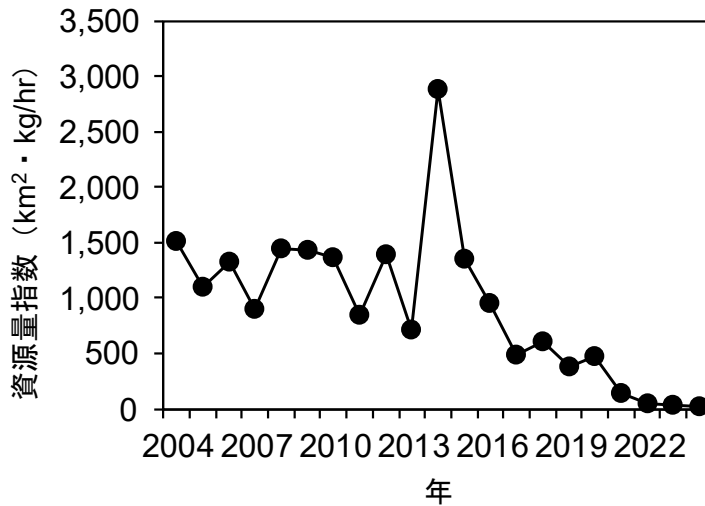


図 12. 愛知県の小底標本船の操業記録から算出したマアナゴ資源量指数 (km² · kg/hr) の推移 (2004~2024 年)

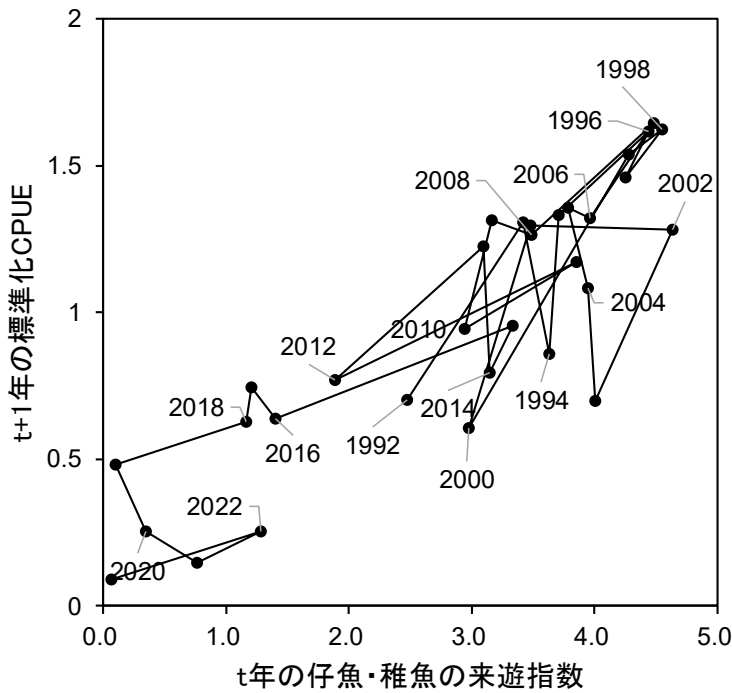


図 13. 伊勢・三河湾における仔魚・稚魚の来遊指数と翌年の伊勢・三河湾マアナゴ標準化 CPUE の関係 (1992~2023 年)

来遊指数：2015 年までの愛知県の主要漁港における船びき網等で混獲された「のれそれ」の混獲指数および 2015 年以降の三重県の着底稚魚調査による稚魚の個体数密度から算出 (補足資料 3)。

表1. 「あなご類」漁獲量（トン）および伊勢・三河湾内のマアナゴ漁獲量（トン）

年	三重県	愛知県	(2 県 合計)	愛知県 外海底びき 「あなご類」	(外底のうち マアナゴの 割合%)	伊勢・三河湾内 マアナゴ漁獲量※	日本全体	韓国
1980	755	886	1641					9,614
1981	475	822	1,297					13,257
1982	524	865	1,389					14,143
1983	421	688	1,109					8,838
1984	688	997	1,685					12,751
1985	576	646	1,222					24,010
1986	438	571	1,009					23,208
1987	447	778	1,225					20,143
1988	436	847	1,283					19,680
1989	260	723	983					23,368
1990	310	921	1,231					22,053
1991	440	860	1,300					22,337
1992	532	1,213	1,745					24,163
1993	244	903	1,147					29,882
1994	313	1,008	1,321					21,703
1995	302	847	1,149	206	36.5	943	12,978	19,667
1996	420	999	1,419	181	31.6	1,238	12,007	17,314
1997	373	1,137	1,510	159	33.9	1,351	11,706	19,136
1998	299	930	1,229	159	25.3	1,070	9,444	11,913
1999	363	990	1,353	146	31.7	1,207	8,168	10,160
2000	282	1,024	1,306	205	31.2	1,101	8,364	8,304
2001	128	686	814	171	21.6	643	7,999	7,676
2002	200	903	1,103	161	24.4	942	8,921	17,210
2003	149	974	1,123	147	21.5	976	8,683	17,451
2004	85	663	748	104	15.1	644	7,937	16,506
2005	106	663	769	104	19.5	665	6,860	14,739
2006	158	739	897	115	25.1	782	7,917	15,242
2007	222	803	1,025	90	18.8	935	6,991	19,399
2008	175	764	939	116	19.5	823	6,339	18,441
2009	130	613	743	103	18.1	640	5,959	13,507
2010	100	535	635	75	17.5	560	5,371	13,757
2011	68	415	483	71	18.6	412	4,374	15,896
2012	68	413	481	73	20.0	408	4,609	16,365
2013	40	313	353	71	20.5	282	4,503	13,405
2014	43	456	499	67	26.0	432	4,011	13,304
2015	37	351	388	57	24.7	331	3,854	12,641
2016	33	319	352	42	24.9	310	3,606	12,632
2017	22	269	291	41	19.6	250	3,422	10,965
2018	19	254	273	30	13.3	243	3,489	11,766
2019	16	233	249	25	18.0	224	3,328	12,447
2020	9	128	137	15	17.3	122	2,739	13,229
2021	4	99	103	13	15.8	90	2,515	12,692
2022	3	86	89	11	18.5	78	2,256	12,733
2023	3	73	76	12	27.4	64	2,121	12,880
2024	1	43	44	8	33.1	36	1,855	-

データ出典) 1980～1994 愛知県:望岡・東海(2001) 三重県:三重県調べ 韓国:FAO Global Capture Production Quantity.

1995～2024 愛知県・三重県・全国:漁業・養殖業生産統計年報 外海底びき:愛知県調べ。

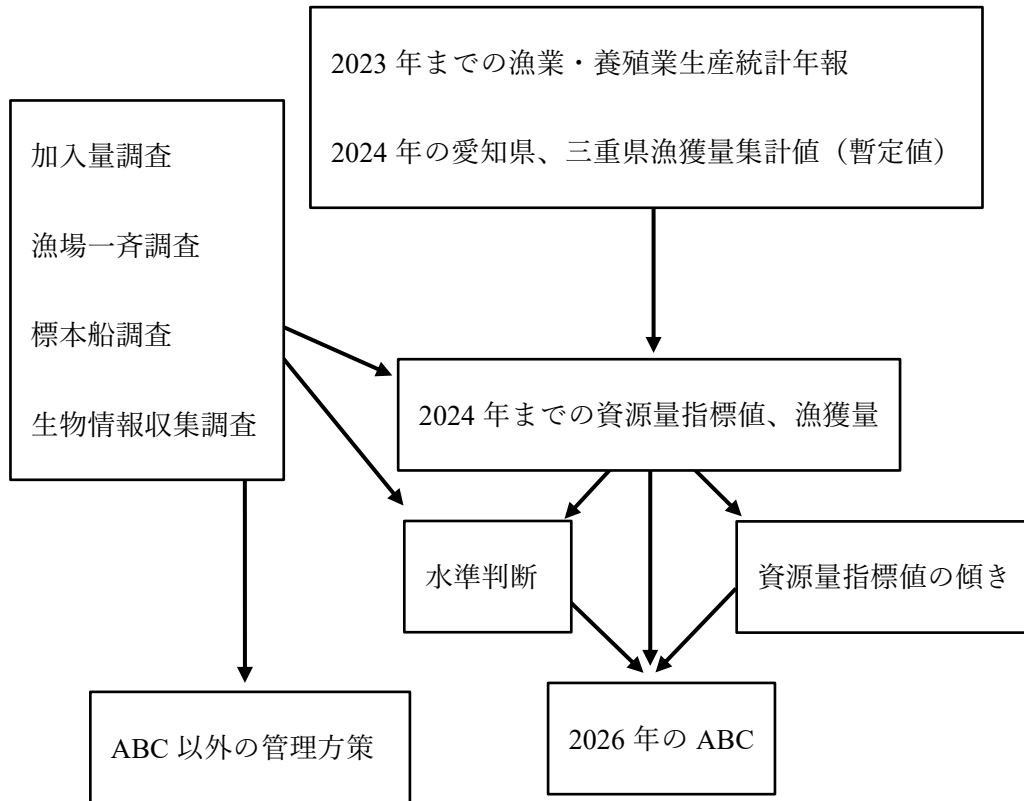
韓国:FAO Global Capture Production Quantity (2010、2014～2018 三重県:三重県調べ)。

※愛知県・三重県漁獲量から外海の漁獲量を控除。※伊勢・三河湾内の「あなご類」はほぼマアナゴのみ。

表 2. 愛知県豊浜漁港の小底によるマアナゴ漁獲量 (kg)、年間出漁統数、CPUE (kg/隻/日) および、愛知県・三重県主要港の小底標準化 CPUE (1989～2024 年)

年	漁獲量(kg)	年間出漁統数	CPUE (kg/隻/日)	標準化 CPUE (規格化した値)
1989	42,124	11,821	3.6	0.41
1990	99,589	11,642	8.6	0.99
1991	118,443	11,289	10.5	0.95
1992	292,216	10,802	27.1	2.14
1993	92,680	10,681	8.7	0.68
1994	158,622	11,008	14.4	1.28
1995	101,515	10,934	9.3	0.84
1996	189,494	9,953	19.0	1.3
1997	269,804	9,412	28.7	1.57
1998	195,979	10,160	19.3	1.42
1999	205,501	9,297	22.1	1.58
2000	215,196	8,185	26.3	1.49
2001	62,618	7,902	7.9	0.59
2002	157,556	7,844	20.1	1.26
2003	171,075	7,915	21.6	1.24
2004	71,691	7,653	9.4	0.68
2005	104,482	8,002	13.1	1.06
2006	150,492	7,960	18.9	1.32
2007	112,465	8,133	13.8	1.29
2008	155,505	7,288	21.3	1.6
2009	114,178	7,147	16.0	1.23
2010	113,684	6,696	17.0	1.28
2011	63,166	6,713	9.4	0.92
2012	107,799	6,400	16.8	1.14
2013	52,899	6,009	8.8	0.75
2014	109,785	5,831	18.8	1.19
2015	60,927	5,928	10.3	0.77
2016	61,514	5,844	10.5	0.93
2017	28,095	4,711	6.0	0.62
2018	44,247	4,461	9.9	0.73
2019	22,196	4,416	5.0	0.61
2020	23,580	3,743	6.3	0.47
2021	11,912	3,777	3.2	0.25
2022	4,065	3,840	1.1	0.15
2023	7,399	3,776	2.0	0.25
2024	1,939	3,239	0.6	0.09

補足資料 1 資源評価の流れ



※ ABCは漁業法改正前の考え方に基づく基本規則2-1)を適用した値。

補足資料 2 CPUE 標準化の手法

令和3年度以降の本資源の資源評価には、従来指標値として使用されてきた愛知県的主要水揚げ港である豊浜港を根拠地とする小底によるマアナゴの CPUE (=漁獲量/隻・日)に加え、三重県における主要地区である有滝の小底によるマアナゴの CPUE を用いた標準化 CPUE を以下の計算により算定し、資源量指標値として使用している。

使用するデータは、1989～2024年の愛知県豊浜港および、三重県における主要地区である有滝の小底によるマアナゴの漁獲量および漁獲努力量(隻・日)とした。一般化線形モデルを適用し、漁獲量を応答変数、年、水揚げ港(豊浜、有滝)の主効果を説明変数(カテゴリカル変数)とし、CPUEとして換算するためのオフセット項に努力量の対数値、リンク関数を \log リンクとした候補モデルを作成した。計算には R Ver4.4.1、 glm 関数を用いた。赤池情報量規準(AIC)を用いてモデル選択した結果、応答変数の残差はガンマ分布に従うと仮定した下式が標準化モデルとして採択された(補足表 2-1)。

$$\log [E(\text{Catch}_{ij})] = \alpha + \text{Year}_i + \text{Port}_j + \log(\text{Effort}_{ij})$$

α は切片、 Year_i は年の効果、 Port_j は水揚げ港の効果、 $\log(\text{Effort}_{ij})$ は努力量のオフセットを表す。

モデル診断の結果も顕著な問題は認められなかった。従って、このモデルに基づき CPUE の標準化を行い、年トレンドを抽出した(図 9、表 2、補足表 2-2)。

補足表 2-1. 標準化モデル検討結果

水揚げ港	データ期間	説明変数	リンク関数	分布	df	AIC
豊浜、有滝	1989～2024	年+水揚げ港	log	ガンマ分布	38	1614
		年+水揚げ港	log	正規分布	38	1688
		年	log	ガンマ分布	37	1737
		年	log	正規分布	37	1787

補足表 2-2. 標準化モデルによる係数推定結果

変数		推定値	S.E.
切片		2.64	0.23
年効果	1990	0.89	0.32
	1991	0.85	0.32
	1992	1.67	0.32
	1993	0.52	0.32
	1994	1.15	0.32
	1995	0.73	0.32
	1996	1.17	0.32
	1997	1.36	0.32
	1998	1.26	0.32
	1999	1.36	0.32
	2000	1.31	0.32
	2001	0.38	0.32
	2002	1.14	0.32
	2003	1.13	0.32
	2004	0.52	0.32
	2005	0.96	0.32
	2006	1.19	0.32
	2007	1.16	0.32
	2008	1.38	0.32
	2009	1.11	0.32
	2010	1.15	0.32
	2011	0.82	0.32
	2012	1.04	0.32
	2013	0.62	0.32
	2014	1.08	0.32
	2015	0.65	0.32
	2016	0.84	0.32
	2017	0.43	0.32
	2018	0.59	0.32
	2019	0.41	0.32
	2020	0.15	0.32
	2021	-0.49	0.32
	2022	-1.03	0.32
	2023	-0.49	0.32
	2024	-1.52	0.32
水揚げ港(豊浜)		-1.02	0.08

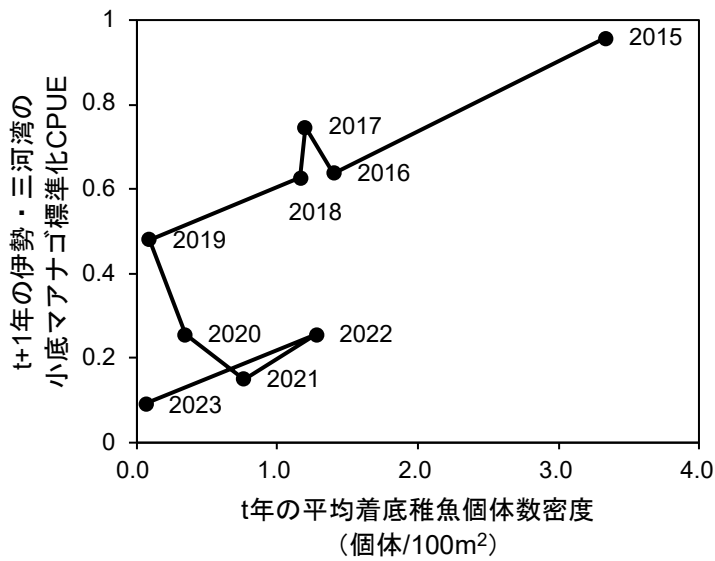
補足資料 3 来遊状況把握のための検討状況

これまで来遊資源である本資源では、その来遊状況について、前年に湾内に来遊した仔魚「のれそれ」の混獲量の指標（混獲指数：愛知県主要港「のれそれ」混獲量(kg)の自然対数値）と翌年の豊浜港の小底によるマアナゴの CPUE との関係から検討されてきた。しかし、2016 年以降はイカナゴの操業自粛により「のれそれ」の混獲がなく、データが得られていない状況が続いている。本補足資料では、本資源の来遊状況を把握するための調査データの蓄積・検討状況を以下で報告する。

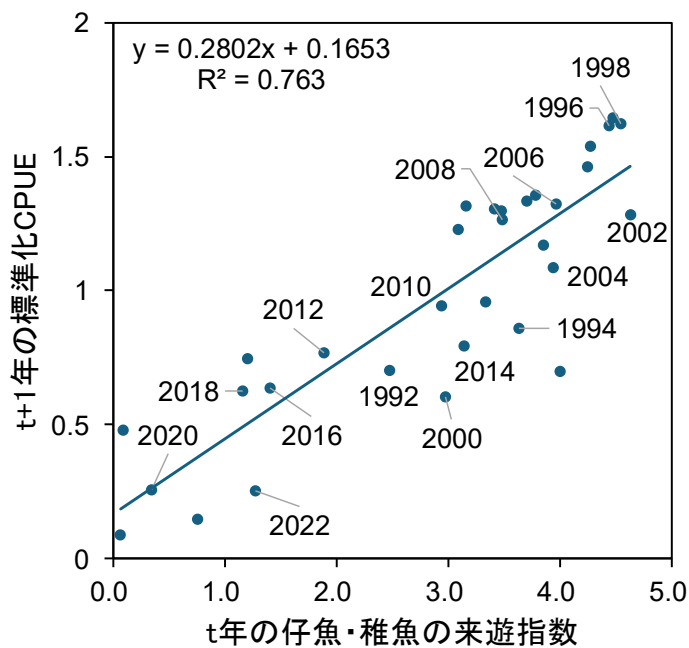
仔魚から変態し着底した稚魚（着底稚魚）を対象とする調査（2013～2023 年）は、5 月および 6 月に三重県により実施されており、解析については現在の調査方法が確立された 2015 年以降のデータを使用した。調査では、村松地先の 2 定点（M-2、新 A-1）において、漁船により調査用桁網（幅 1.5 m、網長 4 m、目合い約 2.4 mm）を船速 2 ノットで約 200 m 曳網し、定点ごとに 3 回の曳網が行われる。曳網ごとの着底稚魚個体数密度は、着底稚魚個体数の計数結果および掃海面積から計算した。これまでに得られた 9 年分（2015～2023 年）の着底稚魚の平均個体数密度（5、6 月、2 ヶ月平均）と、当該年級が翌年に漁獲主体となる 4～10 月の有滝地区における小底のマアナゴ CPUE および、その他翌年の資源量指標値（通年分の小底 CPUE：有滝、豊浜、標準化 CPUE）（補足資料 2）との対応を検討した。加えて、2015 年の愛知県の主要漁港における船びき網等で混獲された「のれそれ」の混獲指数と 2015 年の三重県の着底稚魚調査による稚魚の個体数密度の比率から、1992～2015 年の「のれそれ」の混獲指数を稚魚指数へ換算した上で、仔魚と稚魚の指数を統合した仔魚・稚魚の来遊指数を算出し、翌年の伊勢・三河湾マアナゴ小底標準化 CPUE との対応を検討した。

6 月の稚魚の個体数密度と、それらが主な漁獲対象となる翌年 4～10 月の近隣の有滝地区における資源量指標値との間で、傾きが有意な強い相関関係（ $r^2=0.82$ ）が確認された（補足表 3-1）。また、通年の有滝地区、愛知県豊浜および伊勢・三河湾の小底のマアナゴ標準化 CPUE との関係を確認した。その結果、通年の CPUE データを用いても、着底稚魚個体数密度は翌年の有滝地区の小底 CPUE との間で有意な相関関係が維持された（補足表 3-1）。愛知県豊浜の CPUE とはいずれの月も有意な関係はみられなかった（補足表 3-1）。一方、標準化 CPUE については、6 月の稚魚個体数密度および 5～6 月の平均稚魚個体数密度との間に有意な相関関係が認められた（補足表 3-1）。5～6 月の平均稚魚個体数密度と翌年の伊勢・三河湾の小底マアナゴ標準化 CPUE との関係を見ると、2015～2019 年にかけて来遊状況が悪化していた可能性が推察された（補足図 3-1）。さらに、2020～2023 年は、2019 年までの稚魚個体数密度と翌年の漁獲量の関係から外れ、稚魚個体数密度が高くなっても翌年の漁獲につながっていない。なお、2024 年の稚魚個体数密度（0.58）は、過去最低であった 2023 年の値（0.07）から増加している。

仔魚・稚魚来遊指数と翌年の伊勢・三河湾マアナゴ小底標準化 CPUE の関係を検討したところ、仔魚・稚魚来遊指数は翌年の標準化 CPUE と有意な相関関係にあり（ $p < 0.05$, $r^2 = 0.76$ ）（補足図 3-2）、仔魚・稚魚の来遊指数は、本資源の来遊状況と当歳魚の生息状況を把握する指標の一つとなることが期待できる。算出された来遊指数は、1990 年代後半および 2000 年代前半が高い水準にあった一方、1990 年代前半および 2010 年代前半に来遊の水準の低下が見られ、2016 年以降は低水準の来遊状況が続いている。



補足図 3-1. 三重県村松地区の平均着底稚魚個体数密度 (5~6月) と翌年の伊勢・三河湾の小底によるマアナゴ標準化 CPUE との関係 (2015~2023年)



補足図 3-2. 伊勢・三河湾における仔稚魚の来遊指数と翌年の伊勢・三河湾マアナゴ標準化 CPUE の関係 (1992~2023年)

補足表 3-1. 着底稚魚個体数密度と翌年の小底マアナゴ CPUE の決定係数

着底稚魚 データセット	有滝 CPUE (4~10月)	有滝 CPUE (通年)	豊浜 CPUE (通年)	標準化 CPUE (通年)
5月	0.43 .	0.33	0.27	0.33
6月	0.82 ***	0.76 **	0.44 .	0.65 **
5~6月	0.73 **	0.65 **	0.42 .	0.58 *

有意水準：p<0.001 *** ; p<0.01 ** ; p<0.05 * ; p<0.1 .